

第2回 輪島塗の若手人材の養成施設の 整備等に関する基本構想策定委員会

石川 県

令和7年7月7日

<プロジェクト全体>

- このプロジェクトは能登の創造的復興の一環となる非常に重要な取り組み。

<市場開拓>

- 輪島塗の復興を実現するには海外展開が重要。
- 輪島塗の高い技術力はこれからも承継する必要があるが、市場変化に対応し、新たな市場開拓を行うことも必要。そのためにもマーケティングやプロモーション、原価管理等、アンテナを広く持った人材を育てていくことが非常に大事。
- 世界では、銀行が美術品の海外展開を支援してきた例があり、日本でもメガバンクによる海外進出への支援も重要。
- 人間国宝だけでなく伝統的工芸品の価値はヨーロッパでは十分に知られていない。工芸にはまだ大きな潜在力がある。
- 輪島塗には、富裕層向けの作品や商品を提供できる力がある。そのため、国内外の富裕層が来場するような展示会等で発表することが重要。
- 漆は他のものとコラボしやすい。輪島塗を核として色んな展開が可能。海外展開がしっかりできれば、ここ輪島が、輪島塗を核とした世界的な工芸都市になり得る。

<魅力発信>

- 工芸と観光の結びつきを強化し、広く理解されていくと輪島塗そのものがディステーションの目的地になる。
- 輪島塗の海外展開も重要だが、地場産業としても大事にしなければならない。若者が輪島の地で輪島塗に携わろうと思えるよう、輪島や輪島塗、漆の素晴らしさを伝えていくことも重要な観点。

<後継者確保>

- 養成施設の卒業後の経済的な不安を解消する仕組みが必要。



第1回基本構想策定委員会以降、輪島塗関係者からの主な意見

- 第1回基本構想策定委員会（4月10日）以降、
輪島漆器商工業協同組合、輪島漆芸技術研修所の関係者の他、六職組合（※）、漆芸家等から
聞き取りした主な意見

※木工組合・椀木地組合・朴木地・曲物組合・沈金組合・蒔絵組合・呂色組合

<輪島塗産業の現状と課題>

- 職人の加工賃が、その手間に比べてあまりに低いことが職人が減った要因のひとつ。そのような状況だと、職人は自分の子どもに後継ぎさせないし、やめてしまう。そのため、塗師屋が輪島塗を高く売って、その利益が職人に波及するような仕組みが必要。
- 国内の需要が減少しており、海外展開に取り組む必要がある。箸のような比較的安価な輪島塗ではなく、100万円のお椀でも買ってくれるような富裕層やマーケットを開拓するためにも、若手の塗師屋が海外展開に取り組んでいけるよう、若い世代を育成していくことも大事。
- 「木地」については、特に、椀木地、曲げ物では、若手に教えることができる人が少なくなっている。輪島より木地加工が安い産地へ流れてしまった経緯もある。
- 令和6年能登半島地震による復興需要もなくなりつつある。
- 若い人もベテランも同じ金額をもらうが仕上がり高でどの程度時間かけたかは関係ない。そのため、若い人はベテランよりも量産技術が低く、製作できる量が限られるため、収入が低くなる。

<プロジェクトの方向性>

- 輪島塗の個々の事業者ではなく、産地全体で担い手育成に取り組まなければならない。今回のプロジェクトを成功に導かなければ、今後の輪島はない。また、地元である輪島市と組合がタッグを組まないと上手くいかない。
- 作り手を養成することが第一で、その作り手を活かすのは、産地。生徒がモノづくりに向き合っ、そのモノづくりの技術を武器に産地が世界を目指していく。
- そのため、特に輪島塗の若手経営者が海外展開について学ばなければならない。輪島塗を支える土台を作るには、まずは世界を目指すプロジェクトに仕上げていく必要がある。輪島塗業界を運営していく上で、産地としての海外展開が必要。
- これまでの海外展開は、あくまで個社での展開にとどまってお、また海外見本市の出展も単発的だった。海外見本市に出展するにしても、今ある素材をかき集めて海外の展示会で並べるだけだと次につながらない。そうした課題を踏まえ取り組む必要がある。また、情報発信素材の作成等、輪島塗の海外での認知度が高まる取り組みも必要。
- 海外で販路を開拓するためには、現地のキーマンが必要。海外のコーディネーター（有力なギャラリー経営者等）、アドバイザーの伝手でデザイナーを紹介してもらうなど、海外で長けている人のネットワークを使いながら継続的にやっていく必要がある。
- 海外展開は、輪島市の世界ブランド化推進事業とも連携した取り組みが必要。
- 産業観光について、これまで産地としてあまり取り組んでこなかった。養成施設だけでなく、漆芸美術館や輪島塗会館など輪島市内の輪島塗に関する施設と連動が重要。
- 輪島市の海外事業やこのプロジェクトのほか、輪島塗に関して様々な事業が動いていることから、今後、輪島市が、情報共有する場を設ける予定。

<施設計画（仕様・規模）>

- 養成施設には、産業観光の観点から、ショップ機能やカフェ機能のほか、輪島塗の製造工程が見える機能があると良い。ただし、カフェは、将来の需要を考えると空きテナントになる可能性があるため、飲食可のフリースペースとする。
- 輪島市の世界ブランド化推進事業と連携し、海外からの観光客の利用も検討。
- 塗工程の作業部屋について、あえて中塗りと上塗りを分けて作業室を設けることは不要。
- 呂色も専門科目に加える。呂色は加飾の中に組み込んで、蒔絵・沈金・呂色で2部屋用意する。
- 生徒の専攻に応じて、作業室をフレキシブルに活用できるようにする。

<カリキュラム（研修事業・自己研鑽事業）>

- 入学前に工房見学やオープンキャンパス等を実施し、数か月かけていくつか工房を見学して、輪島の実情を知った上で専門科目を選択する形とし、生徒が専門的な訓練に充てる期間を長くできるようにする。
- 養成施設では、「輪島塗の技術の習得」がメインとするが、市場開拓もできる作り手となるための海外展開やマーケティング面での指導も必要。
- 木地職人の養成について、山中挽物轆轤技術研修所の卒業生を輪島に呼び込むという考え方もあるが、山中と輪島とでは挽き方も異なることもあり、輪島で木地職人を育てていく必要がある。土地や地域は大切。
- ベテランの作り手は、椀100個を何か月で仕上げるか、数をこなすことで量産技術を身につけた。



<カリキュラム（その他の支援）>

- 若手就業者に対する奨励金について、以前、輪島市が実施していた。今回のプロジェクトでも同様のことをするのであれば、卒業生（若手就業者）のためになるように、以前の制度の見直しも必要。
- 卒業生の雇用を担保し、卒業生が輪島に残って活動できるようにするという趣旨から、少なくとも輪島塗事業者(塗師屋)への交付が必要だが、それに加えて、卒業後ただちに独立する者へも交付できるようにしたらいい。

「輪島塗の若手人材の養成施設の整備等 に関する基本構想」の概要（案）

石 川 県

1. プロジェクトのコンセプト（全体）

官民と産地が共同して、輪島塗の魅力を発信することを通じて、国内外から若者を呼び込み、輪島塗を支える若手人材を育成し海外への市場開拓や魅力発信につなげていく。

後継者確保

【養成施設（創設）】

- 輪島塗の製作技術を習得した人材
- 現代の生活様式に合った新商品開発、海外市場の開拓ができる人材
- 地元定着の促進



輪島漆芸技術
研修所

若手人材が、産地の塗師屋や漆芸家と連携し、
市場開拓や魅力発信に取り組み、
輪島塗の新たな世界を切り拓く

市場開拓

【海外販路開拓】※輪島市「輪島塗世界ブランド化推進事業」と連携

- 海外展示会や国内の国際工芸展への出展を通じた海外バイヤー・デザイナー等とのネットワーク構築
※バイヤー・顧客リストの作成（DM・問合せ対応）等
- 海外での展示販売、ワークショップの開催
※石川県の海外アンテナショップ、海外駐在員（パリ、シンガポール、上海）と連携
- 海外の若手の作り手との共同制作など、交流を図り、輪島塗の新たな価値を創出

魅力発信

【産業観光】

- 養成施設には生徒の作品展示や観光客が製作体験できるワークショップスペースの設置
- 精漆工場や地の粉工場を併設するほか、輪島塗の製造工程を見える化 ※生徒の工房（作業室）も活用
- 漆芸美術館、輪島塗会館、工房長屋等の施設や工房と連携した、輪島塗の魅力発信イベントの実施

1. プロジェクトのコンセプト (漆芸の聖地)

輪島塗に関わる機関と連携して魅力を発信することで、国内外から人を輪島に呼び込み、
輪島塗の作り手や観光客が集う

「漆芸の聖地」 を目指す

世界で唯一の漆芸専門美術館。
養成施設や漆芸研修所の卒業生による合同作品展覧会の開催検討



©石川県輪島漆芸美術館

漆芸美術館

漆芸技術研修所

漆芸研修所や養成施設の在校生や卒業生が、
製作した作品を紹介する合同展示会の開催検討



©石川県輪島漆芸技術研修所

仮設工房

自立支援工房
の見学



輪島塗を施した
キリコの展示



©石川県観光連盟

キリコ会館

工房長屋

輪島塗の職人や
漆芸家の工房視察



©石川県観光連盟

輪島塗会館

130工程に及ぶ輪島塗の製造
工程の展示、製品の販売



©石川県観光連盟

養成施設

2. 施設計画

施設整備の方向性

- 「若手人材の養成施設」のほか、「精漆工場」及び「地の粉工場」の3つの機能を付与する
→「精漆工場」及び「地の粉工場」は地震による被害を受けたため、所有する輪島漆器組合において建て替えを検討中
- 輪島塗の製造工程ごとに作業室及び設備・備品を確保するとともに、生徒が祭事用具の修復等の自己研鑽に取り組むことを想定し、大型の祭事用具も保管可能な倉庫も確保する
- 産業観光の観点から、工場も含めて見学者を常時受け入れることを想定し、輪島塗をはじめとした工芸技術を施設の内装等に活用するほか、廊下を広くし、廊下側壁面に大きな窓を設置する等、見学しやすい設計とする
- あわせて、輪島塗の製造工程の展示（見える化）や、生徒による作品展示、工芸品の製作体験ができるワークショップの実施等ができるスペースのほか、ショップや飲食可のフリースペースも設ける

施設規模

- 「若手人材の養成施設」と各工場、産業観光等の機能を全て合わせて
2,000～2,300m² 程度を想定



3. カリキュラム①

基本的な考え方

- 年5人を2年間養成することを想定。入所要件は高校卒業程度。
- 生徒は公募し、応募段階で、「木地」や「下地」等の専門科目から1つを選択する。なお、専門科目の選択に迷う入学希望者については、入学前年に2,3か月かけて、工房見学やオープンキャンパス等を実施し、各工程を体験する機会を設ける
 - ※初年度（R9）は、全ての専門科を対象に募集（定員5名）を行うが、2年目（R10）からは、産地が必要とする作り手の状況も踏まえて、専門科目ごとに定員を定めて、計5名の範囲内で募集
- 輪島塗の技術の習得に加え、現代の生活様式に合った新商品開発、海外市場の開拓ができる人材を養成
- 国内のみならず海外に市場を開拓していくためには、海外市場に精通した専門家（海外で販路開拓の実績のあるデザイナー等）や、海外のバイヤー等による講義を実施。講義には、養成施設の生徒だけではなく、輪島漆芸技術研修所の研修生や輪島塗事業者等も参加できる形とする。
- 養成施設では、輪島塗の技術を講師等から直接学ぶ「研修事業」のほか、卒業後の独り立ちを見据え、技術を磨くための反復（数量をこなす）作業や、責任感を養うための商材に触れる作業を行うための「自己研鑽事業」も実施する

3. カリキュラム②

研修事業

1 指導科目

専門科目：「木地」「下地」「研物」「きゅう漆」「沈金」「蒔絵」「呂色」から1つを選択

共通科目：輪島塗の基礎知識や経営マネジメントに加え、現代生活様式に合った商品開発や海外市場の開拓といったマーケティング面の教養等

2 講師陣

専門科目：ベテラン職人・元職人を基本とする

共通科目：輪島塗事業者、海外バイヤー、新商品開発に実績のあるデザイナー等を想定

※バイヤーやデザイナー等の招へいには、ワーキンググループ参画機関のネットワークを活用

自己研鑽事業

- 養成施設に、コーディネーターを配置して、全国から祭事用具等の修復案件を集めたり、市場と生徒が共同でモノづくりができる機会を獲得するなど、生徒の自己研鑽をサポート

<自己研鑽の取り組み例>

- 祭事用具等の修復：コーディネーターが、全国から修復が必要な祭事用具等を集め、修復対応
- 工芸体験：養成施設だけでなく、国内外に出張してワークショップ
- 自己製作品の展示販売：養成校だけでなく、各所へ出向いて展示販売



(催事用具の修復等)

3. カリキュラム③

国際的なプロジェクト型学習

- 養成施設の在校生と海外学生や若手工芸家との交流の検討。
 - 海外学生や若手工芸家を、アーティストインレジデンスとして輪島に滞在してもらい、養成校の在校生と交流しながら、**共同で作品の制作**を検討。アート分野への応用例を学び、コラボレーションの実践力を養うとともに、グローバルな視点で輪島塗の新たな価値を創出する。

輪島塗の輪島塗事業者（塗師屋の若手経営者等）を対象に、輪島塗の海外販路開拓を支援していくが、今回の養成施設の卒業生や在校生も加えて、グローバル市場で活躍できる人材を育てていく

県や市の海外展開支援策との連携

- 海外展示会・公募展への出展 ※輪島市の「輪島塗世界ブランド化推進事業」等との連携
 - 養成施設の卒業生や在校生が、産地の塗師屋や漆芸家と連携して、ミラノ、パリ、ニューヨークなど**世界的な展示会**や**アートフェアへの出展を実際に経験**。
出展準備から現地での接客、商談、アフターフォローまで一貫して学ぶ。
出展後は現地の反応をフィードバックし、商品やPR方法の改善に活かす。
 - **海外バイヤー・デザイナー等のネットワーク構築**、バイヤー・顧客リストの作成（DM・問い合わせ対応）等
- 海外現地でのワークショップ・展示販売 ※県のアンテナショップ等との連携
 - 例えば、県のシンガポール、香港、フランスのアンテナショップ等でのワークショップの開催やトライアル販売を実施

3. カリキュラム④

寄宿舍の確保

- 養成施設の生徒が、輪島で、安心して学ぶことができるよう、寄宿舍を借り上げて確保

養成施設の卒業生の雇用と賃金の確保

- 養成施設を卒業した生徒が従事する輪島塗事業者や卒業生等に対して、一定額を3年間交付ことを検討

自立支援工房の確保

- 養成施設の卒業生が制作活動が行えるよう、製作活動ができる工房を貸与。

輪島漆芸技術研修所、輪島漆芸美術館、輪島塗会館と連携した支援

- 輪島漆芸技術研修所や養成施設の在校生や卒業生が、製作した作品を紹介する展示会を、合同で開催することを検討
- 輪島漆芸美術館で、養成施設や輪島漆芸技術研修所の卒業生による作品の展示会を検討
- 輪島塗会館で、養成施設や輪島漆芸技術研修所の在校生が、輪島塗事業者と共同で制作した商品を販売するコーナーの設置を検討